

申候由申上候へば、信長大ニ感ジラレ、當座ニ一倍ノ加増ニテ千石賜リ候、其時御申候ハ、伊右衛門へ加増ノコト、能馬ニ乗トテ加増スルニ非ズ、奥州ヨリ當地マデ罷上リ候道中、北條武田ヲハジメ多クノ家ヲ經テ、求人モ無之、某ガ家ナラデハト存ジテ、ハルト、是マデ上ル處ニ、某ガ家ニ求メ不得シテ、空シク歸サバ、敵家へ聞ヘテモ、其外聞失フコト也、其處ヲ伊右衛門笑止ニ存テ、定テ求メタルト存ル也、此心得奇特千萬ニ存ル故、加増申付タリト御申候ヨシ、

〔藩翰譜七〕柳生但馬守宗矩の物語ありしは、○中略秀政堀の卒せし時、高き人も賤しき者も、をし

き人にいひき、世の人、名人、左衛門と名づく、天下の指南しても、越度あるまじき人なりといひき、これ天下をも知らせたき人なりといふ言葉なり、此人の弟を、多賀出雲守と云ふ、北の庄の城修し、築く時に、秀政この出雲守が計ひあしくとて、耻ぢがましく云はれたり、多賀口をしき事に思ひ、其明る朝、北庄を去りて行く、秀政聞きて、不便の事なり、道にこそ飢ゑけれど、黄金十枚取出て、人を走らせてはなむけす、その黄金つゝ、みたる紙を、自ら一枚づゝ、まわをのして箱に納む、近く仕ふ小侍どもに向ひ、およそ財は、用ゐべきに當りては、十枚の黄金をしむに足らず、無用の事ならんには、此紙十枚をも、濫りに費すべからず、汝等我を卑しと思ふ事なかれといひき、誠に名言なりしとぞ、

〔利家夜話下〕一伏見にて、大地震之時、大納言様利家前田を、孫四郎様利政前田の地震小屋にて、御振舞

被成候事之外、御小屋の結構なる様子を御覽被成候、御歸候て、岡田喜右衛門、齋藤刑部、兩人を御使にて被仰候は、地震小屋など申ものは、いかにも、輕々敷、あやまち無之様に仕るもの也、左様の儀は不入事也、むぎと金銀費し後には無理を申て、人の物がほしく成もの也、孫四郎は、一國の主めに候へば、存事も不申、深く心に掛申者か、武者道具馬等の沙汰もなく、毎日鷹野、又三味線など候て仕候、沙汰の限成行儀也、孫四郎一國の主なれば、日本に六十六人の一人也、不作法の行